学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	金丸（岩崎）和子【論文博士】 （比較文化学専攻　昭和59年3月単位修得退学）	本論文は、東アジア全域に広がる弥勒の造形の諸相を、具体的な作例を通して確認し、とりわけ朝鮮半島と我が国の作例を比較しながら、それぞれに地域における弥勒図像の持つ特質を探ろうとするものである。全体は東アジアにおける半跏思惟の菩薩形の弥勒について考察する第１部と、わが国平安時代以降に現れる如来形の弥勒について論じる第２部から構成されている。 第１部では、インド西北部のガンダーラに始まる半跏思惟像の図像を、聖と俗の狭間にある弥勒像と位置づけ、弥勒が世俗世界と解脱世界の媒介者として捉えられているとし、その後インドにおいて発展することがないとする。一方、中央アジアから東アジアにおいて、半跏思惟像は弥勒信仰と結びついて新たな展開をみせものの、初期の中国における半跏思惟像は悉達多太子思惟像である可能性が多く、北斉時代ごろに至って弥勒菩薩像として造像されたと考えられ、朝鮮半島における弥勒下生信仰とともに半跏思惟形の弥勒菩薩の隆盛期となり、我が国にも将来されたと推論する。 第２部では、朝鮮半島に伝わって成熟した半跏思惟像が、兜率天上の王者として、あるいは下生して成道前に思惟する弥勒菩薩の姿として造像され、日本では、伝来の当初から半跏思惟像は弥勒菩薩像であったことについて考察を進める。一方、下生した弥勒如来は、朝鮮半島や日本においても、７世紀には弥勒大仏として造像された。白鳳時代の造立になる下生する弥勒の姿を表わした笠置寺の弥勒如来像は、鎌倉時代以降になると数多くの摸刻像も造像され、兜率天に上生を望む人々の願いを受け止め、我が国における弥勒如来の図像として定着すると推察する。特に、従来ほとんど注目されなかった高麗時代の巨大石仏や日本の石仏などを考察するという新たな視点からの取り組みによって、半跏思惟像とは形は異なりながらも、身近に感じられるという弥勒の性格の一貫性を確認するとともに、図像的には下生する弥勒を表わしながら上生信仰の対象としての弥勒如来像が造像され、阿弥陀浄土への往生と並んで人々に浸透していったと金丸は結論づける。
論 文 題 目	弥勒の造形の諸相　韓国と日本	
審 査 委 員	（主査）　教　授　　秋　山　光　文	
	教　授　　高　島　元　洋	
	教　授　　古　瀬　奈津子	
	教　授　　鷹　野　光　行	
	教　授　　伊　藤　美重子	